水林下（みずばやししした）遺跡（第３次）

遺 跡 番 号　461-078
調 査 次 数　第３次
所　在　地　山形県飽海郡遊佐町吹浦字水林下
北緯・東経　39 度 06 分 19 秒・136 度 52 分 53 秒
調査委託者　国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所
起 因 事 業　一般国道７号遊佐象潟道路
調 査 面 積　1,140㎡
受 託 期 間　令和４年５月１日～令和５年３月 31 日
現 地 調 査　令和４年６月７日～９月９日
調査担当者　大場正善（現場責任者）・氏家信行
調 査 協 力　遊佐町教育委員会
遺 跡 種 別　集落跡
時　　代　旧石器、縄文、奈良・平安
遺　　構　石器集中部・フラスコ状土坑・竪穴建物跡の可能性のある遺構・焼土土坑・柱穴
遺　　物　石器、縄文土器、土師器、須恵器、製塩土器　（文化財認定箱数：10 箱）

遺跡位置図（S ＝ 1:25,000）

調査の概要

水林下遺跡は山形県と秋田県との境にある遊佐町の女鹿地区に位置している。遺跡は鳥海山の国定公園内にあたり、東に鳥海山、西には日本海が広がる。遺跡が立地している地形は、約９万年前に鳥海山から噴出した大平溶岩より古い溶岩台地上の可能性が考えられる。

本遺跡の調査では、調査区を工程に沿って３つに分け、第１～２次調査までにＡ区・Ｂ区・Ｃ区東・Ｃ区西の調査、およびＣ区北の表土掘削が終了している。今年度の第３次調査は、Ｃ区北で検出された遺構の調査と、Ｂ区とＣ区の間の未調査区（以下、旧石器調査区）の調査を行った。

Ｃ区北では、遺構を掘り下げ、遺構の平面や土層断面、遺物の出土状況等を写真や三次元解析で記録するという順序で調査を行った。旧石器調査区においても、旧石器が出土する包含層（Ⅴ～Ⅵ層）を掘り下げる前に、Ⅴ層上面で確認された遺構について精査し、記録を行った。

旧石器調査区では、Ⅴ層上面で確認された遺構の完掘、および記録を行ったのち、旧石器包含層の掘り下げを行った。出土した旧石器は、出土状況の写真撮影と測量機器による座標位置計測を行ったのち、取り上げを行った。また、掘り下げの際に出た土壌、とくにⅥ層の土壌については、２ｍ×２ｍグリッドごとに回収し、整理作業において土壌の水洗別作業を行い、１㎜前後のチップなどの微細遺物の抽出を行った。

発見された遺構と遺物

Ｃ区北では、遺構精査の結果、縄文時代中期初頭に該当する北陸系の新保式土器をともなう大型の土坑２基（SK768・1021）、および９～ 10 世紀ごろと思われる竪穴建物跡の可能性がある遺構２棟（ST709・793）、多数の柱穴・杭跡、土坑が発見された。

縄文時代中期初頭の大型土坑は、２基とも隣接し、そのうちSK768には埋土の上部で複数個体の深鉢形土器と磨石、凹み石がまとまって出土した。２基の大型土坑は、縦断面形が三角フラスコのように、底部が開口部よりオーバーハングすることから、縄文時代の遺構として多く認められるフラスコ状土坑と言える。

このほか、黒耀石製の石鏃が、古代の竪穴建物跡の可能性がある遺構（ST793）の覆土層から出土した。昨年度調査でも、Ｃ区北において縄文時代の土器や石器がわずかながら出土したことから、本調査区の近隣に縄文時代の拠点的な集落跡があった可能性が考えられる。

第１～２次調査では、Ｃ区全体で多数の土師器や須恵器、製塩土器の破片といった、古代に作られた可能性がある土器の出土が確認されてきた。そのため、本遺跡ではこれらの遺物の背後に、古代のヒトの生活の痕跡（遺構）があることが予想される。

Ｃ区北の調査では、東に傾斜する斜面地の中間部と西側において、２棟の竪穴建物跡の可能性がある遺構が発見された。２棟の竪穴建物跡の可能性がある遺構は、ともに東半分が後世の耕作などにより大きく削平されているものの、方形と考えられる。２棟ともに、南端から西端、北端にかけて、幅30㎝程度の浅い溝が認められる。とくにST793では、第２次調査において溝の北西角から、完形の赤焼き土器の坏が天地逆転して伏された状態で発見された。３次調査では、その坏が出土した真下から、安山岩の亜角礫が出土した。

ST709は、南側において多量の土器片を含む焼土が拡がっているのが確認された。覆土からは、土師器や製塩土器なども発見された。ただし、カマドの正確な位置については、はっきりとしない。

写真１　遺跡遠景（西から）

ST709・793が帰属する時期は、ともに出土した遺物から、９～10世紀代と可能性が考えられる。

このほか、フラスコ状土坑の北東に隣接する場所で、２基の焼土遺構が、旧石器調査区のⅤ層上面で多数の柱・杭跡も確認されたが、これらの遺構が残された時期については不明である。

Ｂ区とＣ区東では、これまでに3.5～2.8万年前の後期旧石器時代前半期に位置づけられる石器群が発見された。とくに、第２次調査では、県内初、かつ県内最古の北陸産透閃石岩製磨製石斧が発見された。今年度は、そのＢ区とＣ区東の間の未調査区の調査となった。Ⅴ層上面検出の遺構の完掘と記録が終了したのち、旧石器を包含するⅤ層からⅥ層まで、鎌などで薄く削りながら掘り下げを行った。

その結果、台形石器や磨製石斧のメンテナンス等で剥離された剥片をはじめ、珪質頁岩や玉髄製の剥片、１㎝未満の石器の砕片であるチップなど、500点以上の石器資料が出土した。とくに、１～２ｍ程度の範囲にチップが集中するのが認められ、第２次調査で確認された石器分布と合わせると、この集中部が分布の中心近くにあることがわかった。この石器集中部に関しては、掘り下げた土壌をサンプリングし、整理作業において土壌の水洗別作業と微細遺物の抽出を行った。

まとめ

今年度の第３次調査では、新たに縄文時代中期初頭のフラスコ状土坑と古代の竪穴建物跡の可能性がある遺構が確認された。旧石器では、第２次調査で確認された石器出土の分布範囲がさらに南側に拡がること、またその分布範囲の中心部に微細なチップが集中することがわかった。

チップが集中する事は、この場で石器を集中的に製作していたことを示しており、炭化物や焼けた石器の存在を考えると、定住せず遊動生活を行っていた当時、一定期間この場に滞在し、生活していたことが窺われる。その中で、本遺跡で発見された磨製石斧がどのような役割を果たしていたのかについては、今後の課題である。

写真２　ST709 検出状況（上が西）

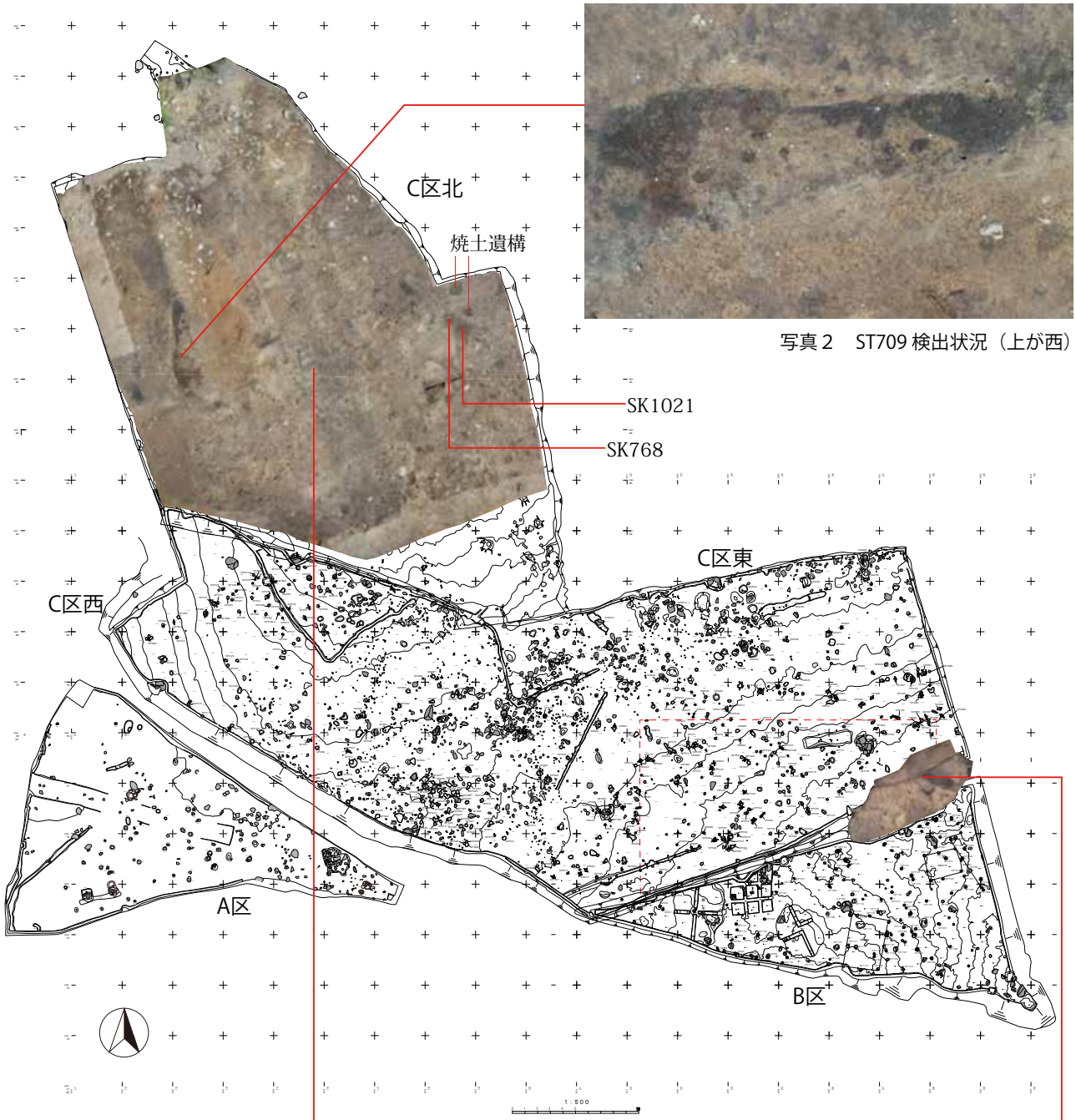

図１　水林下遺跡第３次発掘調査区概要図（S=1/500）

写真３　ST793 検出状況（南から）

写真４　旧石器出土状況（下が北）

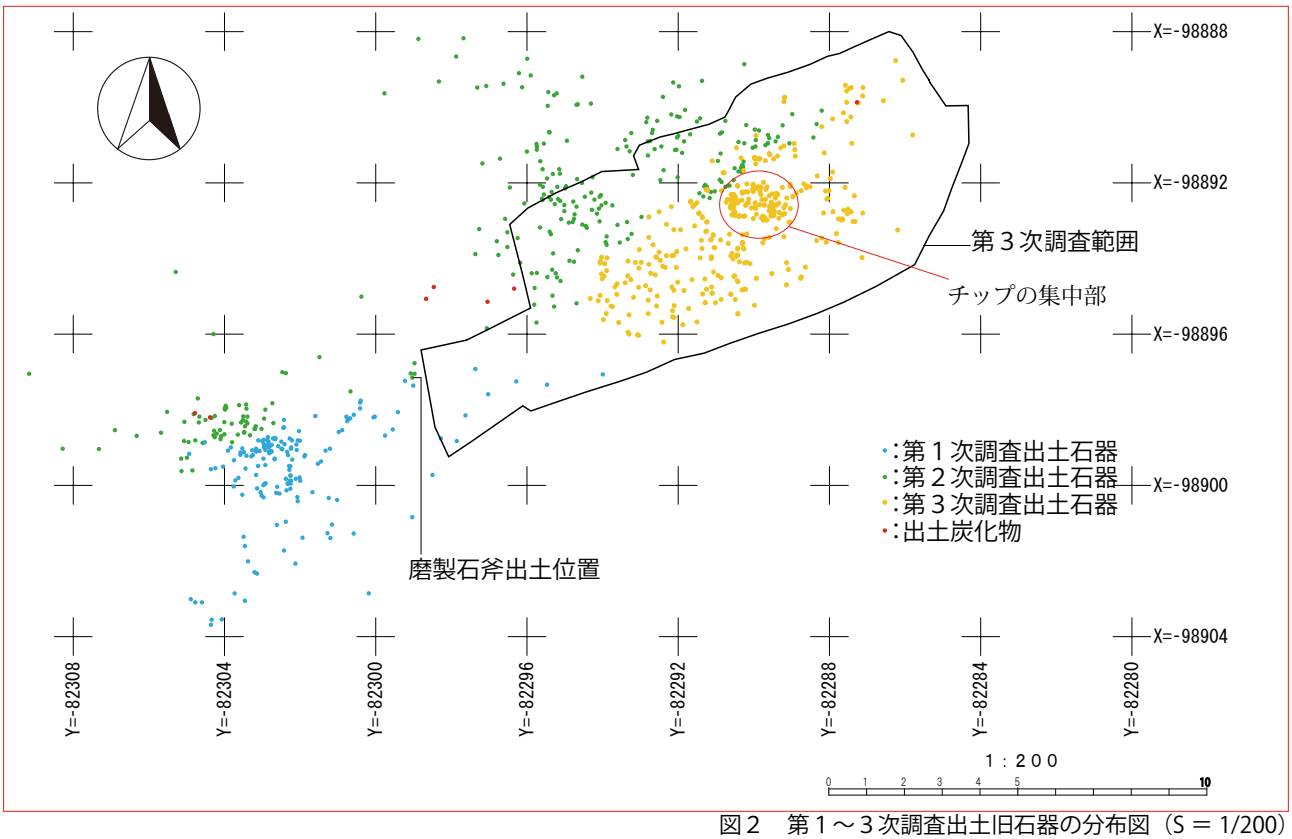

図２　第１～３次調査出土旧石器の分布図（S ＝ 1/200）

写真５　SK768 出土の縄文時代中期初頭の土器と磨石、凹み石（北東から）

写真６　第２次調査出土の磨製石斧（北から）

写真７　台形石器の出土状況

写真８　第３次調査で出土した旧石器（左が台形石器、右が磨製石斧の調整剥片）